



蒸発してた父親逝去の一報から教えられたのは
葬式の本来あるべき姿、その検証をしながらの
16年間、2千数百名の葬儀支援で、間違っ
ないと確証を得るまでの流れと、現行葬式への
苦言は、齒に衣を着せない発言で過激ですが、
自身が経験してきた実践記、全て事実ですから
あえて脚色せず在りのまま書きおろしました。
日本に住む無信仰者を筆頭に、死後費用の不安
心配から抜け出せる一冊なるはずです。

最終章

高い葬式なんていらんや

目次 I

著者プロフィール	1	「前葬」「本葬」「後葬」	30
プロローグ（序章）	8	第一段階『生前』の前葬と本葬	30
宗教を否定しているのではない	11	前妻と同居する子供達への遺産分割	32
『天職』を取り上げた理由	14	第二段階『死後』の後葬	34
『プラセボ効果』	16	生活保護者への葬祭扶助について	36
諸行無常と道徳	16	コラム・死後費用対策	37
一章・裁判所から父親逝去の一報	18	後葬（直葬）の必須項目一覧	38
人生の分岐点となった日	21	現行の葬式は何の為にしてるんだ？	39
葬式の真髓を教えられた事に気づく	25	靈感商法と脅しの商売	40
二章・葬式は前葬・本葬・後葬がある	29	無用な物を売り付ける葬式	41

目次II

三章・葬儀業界に引き込まれる	42	「金」の為なら動かなかった	65
偶然？ 必然？ 運？	46	五章・葬式で経験した疑問・違和感	66
四章・大風呂敷が功を奏した	48	六章・終幕は年齢順に非ず	120
コラム・「まずは10万円を」を拒否	54	七章『前・本葬』『後葬』	139
葬儀屋でなく葬儀支援センターを貫く	55	八章・遺言書・口座について	145
実務スキルはこうして覚えた	56	九章・備えよ常に	150
何故、葬式の主役が家族じゃないの？	57	十章・前葬・本葬・後葬の具体化	166
支援センターは家族の為に存在します	59	十一章・供養とはなんぞや	169
これが各支援プランです	62	十二章・墓を持つ時代の終焉	175
動画で39万円の文字、懐かしい	64	十三章・話し合える場を創り出す	181

目次Ⅲ

183	家族が集まり易い状況を創り出す	183
185	気休めと言える金額なら、それもよし	185
186	厄年は悪い事が起きる年ではない	186
188	十四章・天職を取り挙げた理由	188
189	適材適所	189
190	自分の本質を知る	190
192	対象者から圧倒的な支持を得る	192
192	本気でやるなら妥協はするな	192
193	成功者は誰かの真似をしてない	193
195	諦めない秘訣「好きな事をやれ」	195
196	我慢はしない嫌なら断れ	196
197	小さな楽しみを繋ぐ日々	197
198	相棒と周囲に恵まれてる	198
201	上手い話しには乗らない	201
202	誹謗中傷もありました	202
203	事業で失敗しないコツ	203
207	楽しいから	207
208	逃げずに前向きな思考	208
209	適職でも嫌いな職業もある	209
209	エピソード・人生は面白い	209

著者プロフィール

1954年生、完璧な無信仰者、2008年NPOあんしんサポート葬儀支援センター設立から16年目にして、2千数百件の葬儀支援を行ってはきましたが、宗教に関しては何処か冷めたものを持ち続けてきた感があるのは、生後数か月から5才まで、商売してる祖父母に育てられた事から、就学前に保育園2か所と幼稚園に通い1カ所はカトリック、姉の高校もカトリック、祖父は曹洞宗仏教徒、祖母は途中から創価学会、父親は無信仰という、まあ統一性の無い家庭で育ったせいでしょう。

父親は無信仰でありながら、商売繁昌の神様である恵比寿講は、沢山の親戚や同業者も呼び、アコーディオン奏者が入る派手な宴席を設け、

信仰というより我が家の慣習と、父親の自己満足と見栄だったんじゃないかと思う。節分も大声をあげて「福はうちいゝ、福はうちいゝ、鬼はそと、鬼はそとーッ」と父親が毎年やりました。著者が中学3年の時に家業倒産、鬼は出ていきませんでした。

著者自身も無信仰ながら毎年初詣に行きますが、単なる恒例行事で信仰心とは違います。本日は2024年1月9日で前橋初市、市役所と税務署に用事があり、午前9時前に用事を済ませ、午前10時販売開始の「甘酒」を飲むのも恒例行事のひとつ、コロナ感染で3年間販売しておらず御無沙汰、いつもの流れに戻った嬉しさから2杯飲んだら口の中を火傷、だけど主役の「ダルマ」は買った事ありません。

無信仰と言いながら、特定宗教を否定する方がおりますが多分無信仰では無いと思う。無信仰者は基本どんな宗教でも色メガネでは見ませぬ。自分が無信仰と自覚があるから、他人が信仰心を持ってても、持ってなくても不思議ではないと認識するからです。無信仰という名の信仰心かもしれないと思うこともあります。

だからでしょうか——、根が素直なのか、馬鹿なのか、住職達の建前論を素直に信じ、テレビで見る精進料理に動物の肉はありませんからベジタリアンで、著者が子供の頃は托鉢たくはつする僧侶も多く、米や小銭や施しで質素に暮らし、弱者に優しいのが僧侶、祖母に連れられて行った墓参りで、住職に逢うと、祖母の態度や話し方から、立派な人のような印象を植え付けられてたからでしょうが、人生の中で僧侶や住職との

接触などありませんから、「お布施はお気持ちですから——」の言葉を葬儀支援を始める5才まで鵜呑みにしてた。

ライフワークは、偶然の流れから35才で起業、市内2軒のホテルでの婚礼美粧と美容室数件、貸衣裳など、年商3億円ほどの小さな会社を経営（美容師ではありません）、17年経過した52才の9月、八王子裁判所から1通の封書が届いた事から、予想外の人生へと大きく舵かじが切られることになりました。封書には37年前（著者15才）、稼業のスーパーが倒産する前夜に蒸発した父親が逝去、遺言書を残した事から開封に立ち会うか、委任状を送付するようを伝えるものでしたが、仕事の都合で行けず、後日、父親を看取ってくれた女性ひとから聞かされた父親達が過ごした終幕の流れは、著者の葬式概念を

根底から覆すほど強烈なものでした。

本当の葬式は死後でなく、生前で無ければ来ず、限られた時間をどう生きるか、生きたかを聞かせて貰う時間でしたが、最期を看取ってくれた方から感じた満足感は、著者の心に居座り続ける後悔の念と異なり、微笑ましくも、羨ましくもあり、納得できるものでした。

前橋に戻って、じっくり思い出してみると、葬式とは『人生をと共に過ごした人と永遠の別れを受け入れる為の時間』、ゆえに『生前でなければ後悔を残すもの』、死後は故人となった対象者は自身では何もできないから、それらを故人に代り代行する時間であると分った。

『なるほどなあ』と葬式概念の認識が間違っ

ていた事を自覚させられると、長年、燻り続け消える事のない、祖父母と姉への後悔も『だからかあ』と『目から鱗』後悔の根源も納得、ちよつと待てよ、なら残る家族の生活に支障が出たり、ローンを組んでまで行う葬式は、父親達の終幕の流れのどの部分だろうと比較してみると、どの部分にも当て嵌まりません。

住職と葬儀屋は宗教儀式が一番大事、それが葬式と言ってますが、父親達は2人で生きられる人生を精一杯楽しみ、残す相手の生活を一番に考えたり、逝く人の希望を叶えようと奔走してますが、俗に言われる葬式は肉体と遺骨の処理をする時間ではありません。簡単に言うると大事なのは、『生きてる時』と『残された人の人生』だから、そこに費用を使うべきで、処理に多額の費用を掛ける必要は無いと実行した結

果、残された女性の中にあるのは満足感、達成感、そして良き思い出なのです。

「死」を身近に感じられるのは老人達と、話を聞いた第一声が費用の心配、最低でも100万円は掛かると考えてる人が大半、しかし、かつて自営業の人は国民年金しかなく、最高でも6・5万円の国民年金で、商売が苦しい時は払えず、5万円ほどの人達が多数、夫婦で100万円足らずの年金生活の中で、100万円の葬式代を貯めるなど普通に考えても無理です。

そもそも葬式代100万円とは、何処に掛かる費用なのかと調べてみると、日本は火葬が9%以上だから、逝去してから骨壺に納まるまでの費用は当然としても、それ以外は何の決まりも無いのが葬式だと分りました。意外かもし

れませんが、無くても問題ないのが読経・戒名・祭壇・白装束・遺影・湯かん・火葬中の食事・更に遺骨は自宅保管でも全く問題はなく、火葬料が無料の地域なら10万円もあれば何とかなると分りました。

なら残りの90万円は何だ？ と調べると、読経戒名の謝礼である布施が30万円〜100万円、葬儀屋が最終的には50万円〜で、総額が最低でも100万円、実際に家族葬で支払うのは150万円ほどが平均、ようするに無信仰者の故人や家族なら、無くても全く問題無い、寺と葬儀屋の利益を家族が払っているに過ぎません。何でこんな事が起こるのか？ 消費者とは、それほどお人好しな存在ではありません。葬式経験者に聞いても「寺」と「葬儀屋」が高いと明言するのに、それでも払う理由は何だろ

うと調べてみると、そこにあったのは『靈感商法』と『誘導商法』そして『脅し』です。

読経・戒名が無ければ、あの世に逝って浮かばれない、最後までいいは良い棺で、生花を沢山飾って、灯籠も飾って、食事も豪華に、その挙句に「ここまですれば故人も浮かばれますよ」こんな時代錯誤の靈感商法が今も通用してるのかとの驚きもありましたが、余裕の無い老人を騙したり、喰いものにするような、商売をする人達には、猛烈な怒りが込み上げてきました。

葬儀屋が胡散臭いのは想定内でしたが、宗教者と名乗る人間が、少額年金で暮す老人にも30万円、50万円の謝礼を当然のように請求する――、そんな人を宗教者と呼べますか？ この思いは15年間、2千件以上の葬儀支援を担

当してきた今は、設立当初以上に強くなり、『こんな葬式は絶対に間違っている』と声を大にして公言し続け、いよいよ執筆しました。

勘違いしないよう書いておきますが、著者は高額な葬式を否定していません。金が残ってるなら1千万円の葬式でも、好きなようにすれば良いんです。ただ余裕の無い人達でも、生活に支障の出ない葬式があって然るべき、それが無いのは単なる弱い者イジメ、葬式は高額費用が当然のように思わせるのは、靈感商法の洗脳で間違っていると云ってるのです。

葬儀支援センター設立の、最終的なきっかけは、人の死を利用した弱者イジメへの怒りでしたが、動き出した途端、強烈な流れに巻き込まれ、気付いた時は逃げられなくなり、どっぴり

と嵌^{はま}っていたが真相、周囲の人達から言われるような「人助け」とか「良い人」だから葬儀支援を始めた訳ではないのです。

商売だから儲けて当然、との考え方もあるでしょうが、やってはいけない事、やるべきでは無い事もあって、その代表が「人の死」や「悲しみ」を利用した商売、だから霊感商法が非難されてるのではありませんか？ その霊感商法と寺や葬儀屋がやってる事の何処が違うのか、著者には理解不能、全国民が納得できる説明ができるならしてみろ——、って事です。

葬儀屋が嫌いだから、葬儀屋だけは絶対しないの決意は強く、設立当初は千明^{ちあき}の食い扶持が確保できた段階で、自分は撤退するつもりで、美容業と葬儀支援の並走から始まりましたが、

支援活動を始めてみると、美容業の社長より合ってるようで、次々に目標が見え、対策アイデアさえ苦も無く見えてきました。

父親が導いてくれた『天職!』との思いも重なり、設立から4年後には美容業の株式会社を半年掛かりで閉鎖して、顧客、機具、材料は全て社員に無償提供してから支援活動に本腰を入れると、2年後にはNHKが全国放送、新聞記事にも何度となく取り上げてくれた事から、葬儀支援は時代が求めるものだと分った。

それなら全国全県にあるべきでは？ と思われるでしょう。その通り、日本で一番必要なのは前橋市でなく、東京都なのは間違いありませんけど、残念ながら15年経過した今も国内無二の存在のまま——、理由は単純明快、無休、

24時間対応しても儲からないからです。

無信仰者は「火葬だけの葬式」が当然と世間が認知するのは、団塊世代が終末期を迎える2030年代で無ければ無理かもしれないと考えてましたが、3年間のコロナ感染で葬式の規模が縮小された事と、著者が69才の古希こきを迎えた事から、葬式の本音を書くなら現役で動ける今しかない執筆したものです。

65才以上の独居老人が750万人と埼玉県民より多い今、2030年代は建国以来、最大の葬式数となるのは确实、一方、年金は更に下がり続け、介護保険、税金、医療費、消費税は確実に上がり続けますから、年金生活の老人は当然のように生活が困窮し続けます。

もし配偶者が認知症で施設入所すれば、自身の生活と別途で、月額17万円ほどの費用が掛かりますが、双方の費用が賄えるだけの年金を受給してる夫婦はそうそうおらず、考えれば、考えるほど暗い未来予想しか浮かびません。この世に生を受けた全員が持つべき人生の最大目的は『自分に与えられた人生は、自分で切り拓き、己が人生を精一杯楽しむ事』です。

大半の老人達が抱える不安の筆頭は『死後費用』せめて死後費用の心配だけでも、しなくて済む方法と「死」「葬式」「残る家族」「死後手続き」の考え方について、2千数百件の支援経験からアドバイスをする参考書です。

プロローグ（序章）

高い葬式なんていらんよ

プロフィールでは、著者の生まれ、人生のおまかな足跡、考え方を中心に、何故、葬儀支援の道を切り拓こうとしたか書きましたが、プロローグでは『葬儀支援』の道を歩く具体的なきっかけの発想、一章以降は実話を含め、どんな経験から、何を考えて、どんな動きをし、何を具体化したかを書かせて頂きます。

逝去まで何も考えない家は、じっくり考える時間もなく、葬儀屋に急かせられ、無理をしても、派手で高額な葬式をしないと、故人を軽んじてると思われる風潮すらあり、家族は故人ではなく、故人の兄弟姉妹を筆頭にした親戚への体裁や顔色を伺う傾向が強い。

その根源を探ると、菩提寺住職と葬儀屋の脅しと洗脳の結果「読経と戒名が無ければ、あの世で浮かばれない」と脅す住職、馬鹿でかい祭壇一杯に、供物や生花を飾る事が、供養のよう
に言う葬儀屋の誘導商法に乗せられ、それが当然とばかりに発言する親戚は、金は出さず口だけ出す始末です。

残る家族の生活を無視して金を掛ける葬式、そのどこが供養なのか、納得できる説明の出来る人はいるだろうか、それは供養でなく自己満足でしかないと気付かないのだろうか、自己満足とは『自分』で行うもので、親戚から強要されるものではありません。

住職も同様、あなたは死んだ経験があり、その記憶があるのですか？それが仏教徒ならま

だしも、無信仰者が仏教の言うあの世に行きま
すか? 『あの世』を語るなど「講談師、見て
きたような嘘を言い」で、葬儀屋は、あの家族
も、この家族も、と金を掛けるよう競わせ、煽
る商売を当然のように行い、担当者は歩合給を
稼ごうとするのが今の葬式です。

明治時代まで遡ると、写真を撮ると魂が抜か
れると言われ、著者が子供の頃は家族の写真を
棺に入れると、故人に連れていかれると信じら
れてたが、それと変わらないのが住職や葬儀屋
の言葉、百歩譲って極楽浄土に行けるまでなら
我慢できますが、そうしないと浮かばれない
発言は脅しで駄目だろ、なら証明してみろと言
われても当然、証明など出来ませんから、戯言
と言われるんです。

しかし残る家族の生活は想像の世界でなく、
現実の世界ですから、まずは現実から解決する
のが筋、また、あなたが故人だとしたら、残る
家族の生活に支障が出て、祭壇を豪華に飾っ
て欲しいですか? 残る家族に無理をさせてま
で葬式して欲しいですか?

著者が支援してきた中で、生前を知る故人の
大半は、自分の葬式より残す配偶者や家族の生
活を心配しており「代表、お願いしますね」と
残る家族に無理をさせない葬式を懇願されてた
ほどです。

著者自身も会員さん達と同様、自分の葬式よ
り残す家族の生活を最優先しますから、絶対に
無理だけはするなと釘を刺し、著者を供養した
いと思ってくれるなら、残る家族が、元気な笑

顔で暮らし続けてくれるのが最高の供養、あえて言うなら「俺のこと忘れるなよ」ですかね。

余程の変人でなければ否定しませんから、残る家族の生活が守れる費用で、家族が納得する葬儀屋を探すべきですと言うと「そうは思うけど、それを実現してくれる葬儀屋が何処にあるのさ、自分の知る葬儀屋は真反対で高くする事ばかり考えてるよ」と言われるでしょう。

葬儀業界に身を置いて16年、利用者側からすれば「おっしゃる通りです」、ただ葬儀屋側からすると、いつ依頼が来るか、全く分らない商売、御用聞きにも行けず、そこそこ利益を得ないと存続できないとも聞かされました。

当時は葬儀屋の広告宣伝などなく、大手互助

会がイベントしたり、老人競技に協賛する程度でしたが、2024年の今はネット広告を上手く利用した葬儀屋が施行数を伸ばす図式、その結果、1件でも多く葬式施行したい葬儀屋は、「うちは安いよ」と騙るのが普通、始末が悪いのはあの葬儀屋が騙してる事にすら気付かないのか、気付かない振りをしてるのか分りませんが、昭和初期の日本のようです。

著者は仕事柄もあり、夜中の逝去電話も普通にありますので、酒は飲めず行きませんが、客引きから言われた料金と、支払う料金が全く違う俗にいうポツタリ店のような商法が、何故かまかり通ってるのが葬儀業界です。

安いと言っておきながら、依頼を受けたら、追加、追加で儲けようとする詐欺のような商売

は、育ててくれた祖父母が最も嫌うもの、特に料金については、全ての信用を一瞬で失うもの、低料金、高品質と決めたなら、例え赤字でも貫くことで金銭面の損失はあっても、それが金では買えない信用になると教えられてきた人間ですから、それを守り通してきました。

家族葬に至っては相場の1割価格、葬儀屋が逆立しても出来ない限界域まで到達、堂々と日本一の低価格と言える内容・料金となり、墓への納骨でなく、散骨も沢山してきましたが、恨まれる事もなく、崇られたこともありません。そもそも残る家族の生活を守ろうとする人間を恨む故人がいるでしょうか？ 恨むとしたら、高額な布施や葬式代を請求し、家族の生活に支障の出る人達のほうではありませんか？

皆さんの住む地域に当支援センター同様の葬儀屋があれば良いのですが――、残念ながら、国内一社しかありませんので、著者の父親達がつた終幕の流れや考え方は、とても参考になるものですから、後悔しない終幕期の考え方と過ごし方の参考にして頂ければと思います。

「こうだ」「ああだ」と結論だけ書くより、現行の葬式や流れで、著者が感じた疑問や違和感と、どうあるべきかも書いておりますので、ご自分はどう感じ、自分や家族の時はどうすべきかと考えたり、全員が健康な時に話題にされるのも「もしも対策」となるでしょう。

宗教を否定しているのではない

ここでもひとつ明言しておきますが、著者は

宗教を否定しているものではありません。そもそも宗教とは生きる指針であるはずです。宗教の教えで「穏やかな心で過ごしてる」「辛い事も乗り越えられた」「同じ信仰の仲間たちに支えられてる」など、生きる糧となるのが、本来宗教のあるべき姿であるはず。

宗教者は否定するかもしれませんが、宗教は洗脳ですから人類が行う戦争の最後は、宗教戦争になるでしょう。ただ洗脳とは悪い事ばかりではありません。人の「死」は絶対不変の真理で、最大なる恐怖「死」に対する恐怖心を取り除く洗脳、自暴自棄、暴走を抑制するのも宗教の役割のひとつ、しかし高額な「金」を宗教者に渡せば成仏できると思い込ませる洗脳、葬式は豪華で盛大に行うことが供養との洗脳、金を掛ける事が供養とする洗脳は否定します。

とはいえ無信仰者の著者でも、各宗教の教えは人が生きる上で納得も理解もできるものが多い、問題は、仏教の教えも納得するものが多い、問題は宗教でなく、宗教を宣教する立場の人達の間、自身の生き様と違う建前を法話で語り、語る事に意味があると思ってる事が問題、語る事よりも生き様を見せるべきです。

凡人の著者でさえ祖父母からの教え『自分より弱い人に優しくあれ』『慈悲の心を持って生きろ』と教えられてきたのですから、聖人君子であれば言いませんが、檀家が金を出すのが当然と考える時代錯誤の思考、自分は偉いと勘違いし、横柄で傲慢な言動の住職は問題、この人達は修行で何を学んできたのだろうか？

かつて葬儀支援した中に長年僧侶をしてきた

方がいて、入会相談から母親の死、自身の終幕直前まで僧侶であると一切語りませんでした。自身の終幕が近い事を悟り、終幕後の打合せをした時、初めて僧侶であると打ち明けてくれましたが、僧侶の実態は宗教者と呼べるものでなく、権力と金の世界だった事から、仏教界に幻滅、自分は火葬だけの葬式と散骨を希望すると言われ、その通りに実行しました。

一例だけでの断定はできませんが、著者が感じてるものに近いのは確か、当たらずしも遠からずであろうと思われます。大半の住職は『葬式坊主』葬式を生業とした職業、宗教者なら、布教を主とした生き方が当然、そこには商売要素が無いから宗教法人は非課税なんです。

こう書くと「葬式こそが布教の場」と屁理屈

を言う僧侶がいるかもしれませんが、そんな戯言は単なる保身の逃げ口上、自身で歩いて世間の実態と評価を肌で感じる托鉢たくはつをするとか、自ら先頭に立ち地域貢献するとか、親が仕事から帰るまで、寺の本堂で子供達に勉強を教えたり、預かるなど、無償や低費用で行うなどの寺がどれだけあるでしょうか？

地域の人達にとって、無くては成らない存在であれば、寺や住職の生活を守ろうとするのが人の心理、そんな話しさえ出ないとすれば、地域から不要と思われる存在でしかなく『宗教者とはなんぞや』と自分に問い掛け、自身が変わるか、さもなければ廃業すれば良いんです。

厳しい言い方をしますが、これは当支援センターも同様、いくら著者が「葬儀支援」と大

声で叫び、紙面で訴えたところで、対象者の人達が必要な存在と思わなければ、続ける意味はなく存在価値ありません。対象者だからと著者を食わせる義務も義理ありません。

「助かりました」の言葉で有頂天になり、対象者に対し横柄、傲慢にならず、入会を受けた以上は、常に利用者目線であるべきとの自戒じかいの念を持って、走り続けるための自責の念と云うか、元々の人間が出来てませんから、潜在意識にしっかりと刷りこまれるまで言い続けないと——、だから言い続けるんです

『天職』を取り上げた理由わけ

また余談になりますが、充実した老後を生きるなら、著者のように仕事を続けるのも、ひと

つの方法のようで、69才の著者は50代にも見えるらしく、実年齢を言うと100人が100人驚きますから、適度な緊張と責任感と使命感が良いのかもしれない。

若く見える人と、老けてみえる人の違いは、『受け答えの速さと話すスピード』そして『歩き方を含めたテキパキした動作』のようです。搬送時に「代表、大丈夫ですか？」と言われる動きなら引退、挑戦し続ける気力と体力と思考力の維持には他人に対する責任感が最適。

死後手続きは法的な問題もあり、家族の大半は初耳ですから、出来るだけ簡単な日本語で、相手に理解して貰おうと話すのは、自身が学習して成長するAIロボットのようかもしれない。言いたい事が伝われば嬉しくなり、その回

数が増え家族から、感謝の言葉を聞く回数が増えると『天職か?』と思い始める。

きっかけが父親の終幕だから、父親が導いてくれた葬儀支援だと思い込んでましたが、本書を書き進めると、著者のケースは天に与えられた職でなく、『自分に合うよう創り上げたもの』であると分りましたので、途中それらしき発言もあります、その辺りは執筆後に書いてる本プロローグで訂正とさせてください。

365日、24時間、薄給の仕事、文字にすると最悪ですが、これで嫌に成らないのは自分でも不思議だけど、これをしてきた人達がいるんです。本を出すような人達ですから、大半は成功者と言われる人達、薄給は別として『好きな事をする』その点だけ学びましょう。

登山が大好きな人は、登頂までずっと楽しいかと言われたら、死にそうになったり、高山病に掛かったり、凍傷になったり、苦しい事も多いのに好きです。マラソンも同様で42kmも走るの簡単でなく、いつも調子が良い訳でなく、苦しかったり、完走できない事があっても好き、大多数は「何で?」でも好きなんです。

学ぶのは2点『大好きな事をする』と『挑戦意欲を持ち続ける』こと、自分が本気で好きな事でなければ続きませんので、著者は『自分がした事で喜んでくれる姿を見ると嬉しくなる』という変な性格を葬儀支援の中で活かした。続いて利用者が求めている事を聞き、ひとつの目標が達成する前に次の目標を設定、凡人だから、更に『日々の小さな楽しみを繋いで生きる』と『嫌なことはいらない』を追加しました。

『プラセボ効果』

読経、戒名、高額な葬式を信じるのは『プラセボ効果』日本のことわざで言うなら『鰯いわしの頭も信心から』もっと端的に言えば、一旦信じてしまえば、どんな事でも有難く思えてしまう事やおよろず、八百万の神はこの発想です。天の神、地の神、川の神、便所の神など、何処にも神がいると考えるのも生き方のひとつ、自分の努力はきつと神様が見てくれると思えば、頑張れる人もいます。

されど「神様＝高額な寄付」となると話しは違ってくる。イワシの頭はイワシの頭でしかなく、あたかもご利益があるかの如く誘導、時には脅しまで使って高額な費用を請求するのは、靈感商法と言ってるのが著者です。でも『プラ

セボ効果』を利用して、誰かに頼られるから健康でいられ、追われる仕事だから若くいられると利用するのが著者、良い意味でマインドコントロールする最短は『言葉にして言い続ける事』この辺りの考え方も含め、自分の人生に少しでも活かせたり、参考になったり、或いは反面教師だとしても活かして貰えれば幸いです。

諸行無常と道徳

代表的な仏教熟語に『諸行無常しよぎょうむじょう』があり「全てのものは、移り変わり、生まれては消滅を繰り返し、永遠に変わらないものは何ひとつとして無い」という事、その通り『全てのもの』とは葬式の在り方、仏教の教えでさえ変わると、仏教自身でも言い、100年前と現在の葬式概念が違うのは当然と言っているのです。

コロナ感染のように突発的な問題を除けば、近未来予測は大方出来ますから、これからの時代に合った葬式の在り方、考え方が生まれて当然、ただ道徳や倫理面からすると、弱者に優しくあれ、老人は労われなどの教えは、変わらずに持ち続けて欲しいものです。

日々、葬儀支援の現場に立つ著者でも、死は最大の恐怖で慣れることはなく、人は常に死の恐怖を抱えて生きており、せめて『死後費用』と『死後手続』と『残す家族の生活不安』だけでも拭い去れたら『死後の不安』だけは一切考えずに生きられる可能性があります。

以前から気に成ってるのが『終活ノート』、どう死ぬかを書くノートの印象を受けますが、まず「死」を人生目標にすべきでなく、例えば

命宣告を受けたとしても、人生はどう死ぬかでなく、どう生きるかを貫くべき、人生の終幕は考えずとも、求めずとも、勝手に来るもの死を前提に生きる必要はありません。

1カ月後までにこれをした、半年後までにはこれもしたい、1年後にはこうしていたい、生きる大前提の目標だけで充分、但し死後だけは自分ではどうにもなりませんから『死後の不安材料は全て対処』しておく事です。

終活ノート記載内容が「自分の葬式は絶対に無理をするな、葬式より残る家族の生活を最優先する事が、私への最高の供養で遺言である」といった内容なら称賛で拍手、しかし終幕直前や死後について、こうして欲しい、ああして欲しいと書いてあり、その希望に沿えず、叶えら

れなければ、家族には『後悔』が湧き、その後悔が消える事はありません。

また終活ノートや遺言書作成時に数千万円の余裕があっても、その後の病气、入院、入所等で減り、時には使い切ってしまうえば、記載内容は変わらざるを得ません。当初は良かれと思つて書いた終活ノートが、結果的に残る家族を苦しめる可能性は無いと言い切れるでしょうか、これが終活ノートへの疑問です。

生きる前提とは書きましたが『延命治療』を勧めてるわけではありません。個人的には回復の見込みがあれば別ですが、単なる延命は望みません。胃妻いづまも要りません。静かに枯れるように逝くのが自然、出来れば生涯現役で最後まで現場にいるのが理想です。

本書は料金、単価、システム等の詳細も可能な限り、分り易く記載してますが、「自慢したい訳でなく」「宣伝したい訳でもなく」過去の読書経験から、文面が映像として思い描ける本は楽しく、サラッと読めるからであり、より正確に理解し易いからです。プロフィール・ブログと長めになりましたが、全ての始まりは37年前から、蒸発してた父親逝去の一報が、八王子家庭裁判所から届いた事でした。

一章・裁判所から父親逝去の一報

まだ残暑厳しい2007年9月、仕事から帰るとベッドのサイドテーブルに封書が置いてあり「八王子家庭裁判所」の文字に何事かと開封すると、37年前、家業倒産時に蒸発した父親が逝去、遺言書の開封に立ち会うか開封期日ま